

# 取産 香遺

Vol.85

「大戸神社」  
おおとじんじや

雨乞行事に使われた鎌倉時代の舞楽面を伝える古社



▲納曾利面



▲羅龍王面

大戸神社は、大戸字本宮に鎮座しています。祭神は、天手力雄命です。

社伝によると創建は、景行天皇40年です。日本武尊が東征のおり、勸請したとあります。最初は、現在の大戸字白幡周辺に鎮座したと伝えられ、その跡地には明治初年まで周囲に巡らせた土堤が残っていたといわれています。その後、孝徳天皇元年に現在の地に遷したと社伝にあります。

明治の初め頃に、県社に列せられ、一時期は香取郡中の総鎮守でした。現在は近郷50余地区が氏子となっています。社殿は、本殿・中殿・拝殿からなっています。現在の建物は、宝永4年(1707)に徳川綱吉(第5代徳川将軍)により改築されたものです。

大戸神社には、舞楽に用いられた面が伝えられています。納曾利面2面と羅龍王面1面です。

す。2面とも鎌倉時代末期の特徴を持っています。社伝によると、蒙古襲来の時に鎌倉の武将が奉納したとあります。納曾利とは、舞楽の曲名です。納曾利面は、この曲で舞う際に使われるもので、一人舞と二人舞とがあります。

羅龍王面は、縦30・3cm、横19cmの大きさで、頭上に翼をもった龍を乗せています。面裏には、「嘉暦2年戊辰」の紀年銘があります。戊辰は嘉暦3年の干支です。嘉暦2年は1327年です。

羅龍王とは、仏教の八龍王の一人です。妙法蓮華經の序品第一などに記されています。面は、雨乞いの儀式に使用されたといわれています。その昔、干ばつに際し、雨を待ち望む人々の強い願いが込められたことでしょう。この3面は、昭和30年12月15日に千葉県の有形文化財に指定されています。

納曾利面2面は、ほぼ同じ

大きさで、縦19cm、横17cmで

問い合わせ

生涯学習課

☎(50)1224